

文物が語る音の世界—阮咸—

天理大学国際学部教授

中 純子 Junko Naka

楽器としての阮咸

阮咸とは、どのような楽器か。下の写真（『正倉院美術館』講談社、2009年、148頁）のような形で、四絃の楽器である。



この写真の阮咸は螺鈿装飾も美しく、「国家珍宝帳」（天平勝宝8年（756））に「螺鈿紫檀阮咸」とされた正倉院の宝物である。琵琶の一種である阮咸は、外来起源であるかそれとも中国起源であるか。岸边成雄氏はかつて、「亀茲壁画には阮咸によく似たリュートが多くみえる。三～八世紀の壁画で、中国の美術や文物の影響をほとんどうけていない壁画上に見える」と述べられて、阮咸のイラン起源をほのめかされた（『天平のひびき 正倉院の楽器』（音楽之友社、1984年、24頁）。一方、林謙三氏は、阮咸を「漢式琵琶、秦漢子の改造と認められる唐代の新興楽器」とされた（『東アジア楽器考』カワイ楽譜、319頁）。阮咸が、外来起源か中国起源かについて、実は最近の研究（魏蔚「阮咸之流変及啓示」（『音楽研究』2019年第5期）でも決着がついてはいないようなのである。

阮咸という人物



阮咸という楽器名は、人物にその由来がある。阮咸は、3世紀魏晉の時代の「竹林の七賢」の1人である。世俗との葛藤を通してそれぞれに自己を際立たせた7人のなかで、阮咸は音楽・楽律に精通して、「神解（神わざ的な理解）」と言われた（『世説新語』術解）。また、『晉書』阮咸伝には、阮咸が「音律を妙解し、善く琵琶を弾く」とある。阮咸が琵琶を得意としたことは、その後六朝期に上のような「竹林七賢図」（吉川忠夫『竹林の七賢』世界思想社、1996年、7頁）にも描かれ、阮咸の必須アイテムとなった。

楽器阮咸の命名

8世紀には「阮咸」という名で日本にも齎された楽器阮咸は、いつ命名されたのか。最初にそれに言及したのは、杜佑『通典』（801年成書）巻144「楽四」である。

阮咸も亦た秦琵琶なり。而して項の長きこと今の制を過ぐ。十有三柱を列ぬ。武太后の時、蜀人の蒯朗 古墓の中より之を得たり。晉の竹林七賢図の阮咸の弾く所は、此れと類同じくして、因りて之を阮咸と謂う。咸は、晉世に実に琵琶を善くし音律を知るを以て称さる。蒯朗は初め銅でつくりし者を得るも、時に之を識る有る莫し。太常少卿の元行冲曰く「此れ阮咸の造りし所なり」と。乃ち匠人をして改めて木を以て之を為らしめ、声甚だ清雅なり。

「阮咸も亦た秦琵琶なり」という記載に注目したい。まず「秦琵琶」という言い方は、管見によると唐代以前の文献では確認

できない。もともと「琵琶」は、後漢から中国の文献に記載がみえる。劉熙『釈名』釈楽器には「枇杷は本と胡中より出づ」（琵琶を枇杷と表記）として、外来楽器と明示されている。その琵琶の前に漢より古い「秦」を付けたのが「秦琵琶」である。外来楽器の琵琶が入ってくる以前の琵琶ということであろう。つまりは中華の楽器と言いたいことは明白だ。「阮咸も」というのは、ほかにも秦琵琶があり、『通典』はこの記述の前に「今の清楽は琵琶を奏し、俗に之を「秦漢子」と謂う。円体、修頸にして小なり」として、丸い胴、長い頸で小ぶりの楽器を紹介している。また、宮廷音楽「清楽」（中華の伝統ある音楽）の楽器説明には、使われる楽器のなかに「秦琵琶」とある（『通典』巻146「楽六」）。これが俗に「秦漢子」と呼ばれた楽器ということだろう。さて、阮咸と命名された理由が、古墓から出てきた銅製の楽器が、「竹林七賢図」にみえる阮咸が奏でているものと類似していたとするのにも、中国の文人楽器と位置づけた意図が見え隠れする。さらに宮廷音楽を掌る太常寺の官僚の元行冲が、古墓の銅製のものを阮咸が造ったとして、それを匠に木製で作らせたという。これは、どう考えても素直に頷ける話ではないが、そのようにして中華文人にまつわる楽器「阮咸」が創出されたということだろう。

文人楽器阮咸

この企てが功を奏したことは、右図のように正倉院の金銀平紋琴の意匠（『正倉院美術館』153頁）に、七絃琴を弾く文人と酒を飲む文人とともに、阮咸を弾く文人が描かれているところからも、その奏楽が文人の嗜みとされていたことが理解される。また、晩唐の『盧氏雜説』に、阮咸について「近ごろ能くする者少なからざる有りて、琴を以て調べを合わせ、多く之と同にす」（『太平広記』巻203所収）とあり、伝統的な文人楽器である七絃琴と合わせて演奏されていることが窺える。中唐の劉禹錫（772～842）が「令狐相公が南斎の小讌にて阮咸を聴くに和す」詩（『劉禹錫集箋証』外集巻三）に、「雅声は蘭室より発し、遠思は竹林を含む」と、その音を雅声とし、そこに竹林の七賢をほのめかし、さらに「影は白団の扇に似て、調べは朱絃の琴に諧う」と、団扇に似たその丸い形と、文人楽器である七絃琴に合うその音調を詠じている。阮咸が雅声であるという認識は、宋代になってすぐの時期まではあった。宋の太宗（976～997在位）は、もともと四絃の阮咸を、中国五行の木・火・土・金・水に因んで五絃にして「五絃阮」という楽器をつくらせ、詔を出して宰相たちに聞かせた（『宋史』巻126楽一）。しかし、その後のような経緯か、宋代に編まれた陳旸『樂書』（1100年頃成書）の巻145では、阮咸琵琶として「俗楽」に分類されている。雅か胡か、その出自はおくとしても、阮咸は「雅声」といわれたり、「俗楽」の楽器に分類されたり、ともかくもしたたかに生き抜いたらしい。

